暑い・熱い美麗島

～うるわしの TAIWAN・TAIPEI の３年間～

前　台北日本人学校
現　苫小牧市立沼ノ端中学校　能登敬久

１　はじめに

2004 年より北海道苫小牧市立緑陵中学校から台湾の台北日本人学校に派遣されました。埼玉出身ですが、10 年以上北海道に勤務していましたので、最初に堪えたのは暑さでした。また予想できない毎日の連続に食欲を失う時などもありましたが、一生暮らしたいと思えるほど台湾に愛着を感じています。

２　ＴＡＩＰＥＩ　ＴＡＩＷＡＮ

台湾は、１６世紀のポルトガルに発見され、うるわしの島（Formosa）と名づけられてから、スペイン、オランダ、明・清朝、日本、中華民國の政治や文化などを受け継いできました。歴史的に中国の統治下に置かれる期間が長かったことから、中国の春節、中秋節などの年中行事が中心になっていて、孔子廟や龍山寺といった伝統的な建造物が台湾の象徴的な観光名所となっています。

（ドラゴンボード国際大会に参加）

現在の人口約２２００万人のうち９８％が漢族ですので、中国語が公用語です。しかし、戦前の日本教育を受けてきた高齢者の方は、流暢に日本語を話すことができます。親日的と言われる所以の１つです。戦後はそのような背景から日本とのつながりを残しつつ経済を発展させていきますが、ベトナム戦争の頃からアメリカとの経済的・文化的なつながりも強まってきています。

３　台北日本人学校の概要

台北日本人学校は、２００７年２月段階で、全校児童・生徒７６２名、小学部児童５７３名（２１学級)、中学部生徒１８９名（６学級)。世界の日本人学校でも有数の大規模です。

その歴史は古く、１９４７年に「国立台湾大学附設留台日籍人員子女教育班」という名称で台湾大学の独身宿舎を借りて開校したことに始まります。

（台北日本人学校の正面玄関）

その後、企業の進出にともなう生徒・児童の増加により、５回の移転があり、現在の天母に校舎を移したのは１９８３年のことです。児童･生徒数が１１９０名を記録した１９８９年（平成元年）からは減少の一途を辿っています。

台湾では、外交関係の課題、１９９９年の台湾大地震や度重なる台風襲来などの災害、また２００３年のＳＡＲＳを筆頭に腸病毒、デング熱、鳥インフルエンザなどの問題も続いています。

しかし、沒關係（北海道弁＝なんもだ）という言葉に象徴されるような開放的な一面もあれば、地図をもっている日本人をその場所まで案内してくれるほどの親日的な一面もあります。

４　海外の日本人学校

①　一期一会

日本人学校の生徒の流出入は非常に激しいです。企業の海外勤務は３年から５年ですから、学級単位で見ても、１年間で２人～５人は退学をし、途中編入者が同じぐらいいます。

そんな状況ですから、児童･生徒のほとんどは編入者といえるもしれません。ですから、子どもたちも編入者にはとても寛容です。日本では学校に行けなかった子どもがここでは通えるようになったという事例もたくさんあります。

私たちの任期は２年～４年ですから、初任者のような時間を過ごしていたと思っていたら、翌年には学校の実働部隊として運営の中心としての役割に変ります。運よく３年目を迎え流れがつかめたころには帰国となります。

ですから、学級づくりや学校の役割は常に単年度で決着させなければなりません。まさに一期一会です。ここでは、２年続けて子どもたちを受け持つということは希です。

中学校経験者でも小学部の低学年を受け持つというケースやその逆も多くあります。中学部でも専門教科を受け持つことができるほうが珍しいと言えます。

（台北国際交流展のよさこいソーラン）

②　国際理解の宝庫

日本ではいかに異文化理解の場を設定するかと頭を悩ませたものですが、ここでは違います。職業体験のアポイントもすべて中国語で行い対外試合をすれば、それは国際試合です。

目の前にはアメリカンスクールが存在し、５分も歩けば現地校もあります。全学年、年に１回交流会も実施していますが、その中味も多様な内容を取り入れることができます。

（現地校交流会での餅つき）

これまでの中学部の交流会では、餃子づくりや餅つき大会、お互いの文化紹介、体力測定の合同実施、一日交換留学などが実施されました。

肝心な自国文化理解については、やや薄れがちになりますが、剣道部や和太鼓部の活動は盛んです。日本人会共催ＰＴＡによる夏祭りは、日本並みの規模で現地の人たちにも紹介されるほどです。小学部ではこいのぼり集会や七夕集会など年中行事も計画的に実施しています。

また、中学部の修学旅行ではあえて日本でホームステイ（民泊）をさせてもらいました。日本では実施できなかった取り組みでも、海外では貴重な体験場面と認識してもらえることがあります。

（長崎の民泊・漁業体験）

５　特色ある学校づくり

年間授業日数は２００日を切らないようにするため、災害等で３日以上の臨時休校した場合、振り替え予備日に授業を行います。日本のように出張や研修はほとんどありませんし、祝祭日（端午節・中秋節・国慶節・二二八和平祈念日）も少ないため、日本の標準授業時数の１１０％を確保できるよう教育課程を編成していました。

（日本人会共催ＰＴＡ夏祭り）

①　中国語の時間

中華圏ですので、中国語の時間が特色の一つです。学年を３人の現採の先生方が初級・中級・上級に分かれて指導します。現採の先生方が作成したオリジナルテキストを使用しています。

また、総合的な学習の時間に英会話と選択語学（英会話か中国語）の時間を位置づけています。コース内での語学力差への配慮、発達段階に応じた外国語指導のあり方などの課題もありますが、子どもたちの取り組みは意欲的です。

②　小中併設校

小学部と中学部が併設する学校ですので、それぞれのよさを生かしながら学部別の経営を取り入れています。中学生の横に小学１年が並ぶ運動会の開会式は、日本でもそう見られるものではありません。

小学部と中学部が合同で行う授業や図書委員会による絵本の読み聞かせ、そうじ交換留学、中３生徒が小１生徒と一緒に過ごす学習などは、豊かな心や共に生きる国際人の育成にも大きな影響をもつ教育活動と言えます。

③　国際家庭児童・生徒

（台北日本人学校の大運動会）

台北日本人学校の特色の一つとして、国際結婚（父か母が台湾人）の児童・生徒が多いことがあげられます。全校で見ると三割ほどですが、中学部の三年生の割合を見ると四割を越えます。

もともと海外駐在の児童・生徒が多く、保護者の年齢でいうと三十代から四十代の中堅世代が派遣されることが多いですから、その世代の子どもの割合が高くなります。よって中学部の世代をもつ保護者は、受験を前に日本にもどることが多くなりますので、結果的に台湾に仕事で残る国際家庭の割合が高くなるという実態です。

（中学部卒業証書授与式）

日本人学校はもともと海外にあり日本国内と同等の教育を施す私立学校という本来の趣旨にも限界が見られるようになりました。というのは、親が仕事で台湾に残るというご家庭が４割ですから日本ではなく、台湾の現地の高校に進学させる実態が広がっていくということでもあります。

現地の学校に進むということは、九月開始制へ期間調整をどうするかという問題、現地校での適応力（中国語会話能力、現地校学力内容の定着）をどうするかということも無視できなくなってきています。

しかし、日本の学力問題や児童生徒数の減少にともなう財政確保の問題が浮上していく昨今、現場では教職員配置定数も変らない実態もありますから、その解決にはまだまだ時間が必要です。

６　現地の教育事情

（現地校の軍事演習の授業）

台湾現地校の年間授業日数は２００日、１学期２０週、週の授業日数５日、国民小学の１単位時間４０分、国民中学の１単位時間４５分です。台湾では２０００年から９年一貫教育のカリキュラムが公布され、２００１年から小学校段階で英語教育の必修化を実現させました。

台北市では１９９８年から第３学年の英語教育が開始され、その後、市の方針として１学年から英語教育を行い、英語の授業に週２単位時間（８０分）を当てることを原則とし、台北縣では第３～第６学年において週２単位時間（８０分）を実施しています。また、徴兵制が行われているため、軍事演習の時間などもあります。２００７年からは高校の義務化も実施しています。

７　おわりに

あっという間の３年間でしたが、忘れられない思い出ばかりです。毎日の流れに追いつくだけで頭が飽和状態になり、たくさんの情報に混乱しドタバタ劇を繰り返した１年目。１年間のほとんどを土日返上で大晦日まで学校で過ごし、誰よりも職員室に詳しくなった？２年目。気がつけば新しい年度の先生方、現地採用の先生方、保護者の方々、子どもたちにフォローをしていただいた３年目になっていました。一生ここにいたいと思っていましたが時間が来てしまいました。

（生徒会主催中学部絵文字）

子どもたちの力は偉大です。台湾では北海道の子どもたち同様、日本の架け橋となって交流会を運営してくれたり、私に代わって通訳を担ってくれたり、バレーボールの国際交流試合を展開してくれる子どもたちと出会って本当に幸せな時間を過ごすことができました。２０年後にここで出会った子どもたちがどんな人になっているのかとても楽しみです。このような機会を与えていただいた関係各位の皆様に感謝申し上げます。

（長崎での民泊体験を終えて）